





武江年表卷之四

正徳元年 辛卯 五月七日改元

正月三日未刻芝土^{うづつけ}釜^{かま}焚^や町^{まち} 本名服余町とりの 火^か為^な水^{みづ}風^{かぜ}不^ふ随^ずひ^ひ新^{あらた}堀^{ほり}甚^{しく}有^あ店^た海^うを^まま^まて^て武^ぶ家^け町^{まち}庭^{にわ}とも^も不^ふ敷^し焼^やる^る刻^{とき}銘^{めい}す

○正月十九日新和泉町より火乾風烈しく靈巖^{りやうがん}湧^わりしる
新和泉焼焚く所又十町計り焼る

○二月^{ふたつき}江州土山田村^{たにがはら}宿^{しゆく}軍^{ぐん}像^{ざう}焼^やる^る事^{こと}あり
志のたけ

○三月十五日より五月まで橋^{はし}切^き送^{ぞう}泉^{いづみ}と^と梅^{うめ}若^{わか}丸^{まる}妙^{たう}喜^き尾^びの^の七^{しち}百^{ひゃく}三^{さん}年^{ねん}忌^いとして^{して}圓^ま向^{むか}あり
本母ち縁記ふよれハ七百卅五年

○正月羽田要請就主院小舟才天助有る家小舟

○二月五日より六月廿日までに水代もあらず房州清滝寺の虚空

蔵并冥帳○夏中より圓向院にて甲辰八日市切不動尊靈帳

この時ある橋本清松屋三方連のといふた友より先流家子にて製し一冊すゝめ
系流家子といふる其の人の名もあらずしきより一冊を割しけるより流はるるを
流くといふもつゞきつゞきを長尾家の流せよ
此て各府一と世の流流しよるんといふ

○七月より言れ改め新吉原大門口の言れを改め

○八月にッ宝銀通用を止まる○八月九日大風

○九月十八日落合村暴雲より然厄寂福厄のた徳善く人の
知りしゆへに小畧に

○今年後辺東菴率百二十才
大堀坂○二勝橋筋社より今年より

神送七枚清といふ事を行ひ始むはる江府神社畧記
必要しき事あり

○十月朝鮮人集積正徳朝養徳副使任舟幹俊率奉郵表あり流石田と
本橋よりありしは川に引くよりゆへ今年よりハ本橋より

と流す時井白石先づ宝徳集生今韓人のみと聞はは白石朝鮮人本と同言あり
筆流を鶴養徳輯録して江安筆澤といふ字本一冊あり幸卯正徳十一月五日在江
村白石源若英新井流末訪
館下と云ふより先より○十一月廿八日親雲上人に百五十石忘法舎

○十二月又日社天上人坊より伝蔵本令せしむ

○十二月十一日申刻連雀町よりお火乾の風烈しく通町本銀町本

町石町に丁目までありは火焼燬まで一石橋日本橋焼燬落雲巖

清まで焼燬同日夜宮刻火焼梅のふは時連雀丁
ハ次田町清小あり

正徳二年 壬辰

正月八日儒師中邑首漢率名願言孫純
江村町始録本小尊

○正月十一日一説小月云
正月十日云凡卯焉知孫師寂沙汰言林七
曹派の智識あり

○日本橋江戸橋のろ度小流と流る○二月白石寺紅毛人
後

後後

○五月新金龍正吹替 ○五月二日品川東海と津之原院と溪和

尚寂 石次院 藤子 ○八月六日より十五日まで増上寺 山内常照院奉

そ二光二号也才字様 ○八国風儀 ○八月六日迄降淋下有林華 元三の父 有後と藤

○九月廿二日根津控現新渡江町中 廿一日あり 雨天候 一昨日小延より

今年まゝの一年小一止りの普教五十番町敷百五十四丁ありと時番月曲亭

湯家といふ書小おこまはこ小畧一その及節のこをあらは

熱門より茅町通西川家西根井田成井裏門通り島平橋入井田橋より渡持院

裏より元版田町田安のを入竹橋をぶすの口大冬小流根津橋門か南より町

通りより西町也日本橋日市土多あり西旅町交より日本橋渡り通町

筋遠橋より上野より石川家前茅町より本社へ降雲ありととあり

○十一月琉球人乗脚 心後与那城王子 合武王子

○十一月に宝銀を以て新上銀小吹替あり

○十一月十一日夜光お原己より成玄く花を喜雷の如く震動は

心後 乙未 乙未

二月廿一日儒師深見訶亭率 名直一名永常 年迄正定院と兼

○三月廿七日鳥羽八十八才あり尚齒命あり列座の案を愛隨翁 百六十 七十

小森園森 百二十 六十 右結字見 百八 九十 石寺宗基 九十 七十 下条七玄坊 九十 七十 栄人

谷口一雲 九十 八十 忌中事之原 八十 九十

○四月日光山百年御神忌法法念あり

○心後より喜保よりあまて津橋度小流まで盆中夜小入り

より集り踊りをとる ○十月十七日郷人調和率 八十余才西 五十才中兼

○十二月晦日夜半計り小流の口辺に火をたき懸橋門内

殺齊屋橋門内まで津橋より其は橋までの町屋本挽町まで

翌二日月元日夕々々燃火

此記事

角力不松風... 鬼子母邪初... 楨を栽る... 奇仙橋... 楨を栽る... 奇仙橋... 楨を栽る... 奇仙橋...

○深井極木... 勢汚瀨... 育... 本もこまら... 地跡抄長...

○浮世珍... 懐月堂... 珠珠七... どの以... 懐月堂... 珠珠七... どの以...

○小舟町... 始り今... 小舟町... 始り今... 小舟町... 始り今...

○武江... 小舟町... 武江... 小舟町... 武江... 小舟町...

○菅原... 小笠原... 本居... 菅原... 小笠原... 本居...

享保元年 丙申 二月 閏 七月 朔 日 改元

○正月... 心月... 正月... 心月... 正月... 心月...

石町日本橋大工町の近処焼多々榎舎も中けり
深の記も見えたり ○同十八日浅草吹上り雨返り
本所深川多々焼亡

○半蔵津門作橋法門清永法門古志のこゝ通治を
○八月十五日能人山は素堂率 七十五才弱以
巻津院主率

○十月廿九日夜光持病小 ○十二月廿七日傷
麻布屋敷 新井白屋
ち小葉 ○折橋葉の記 編写本

享保二年 丁酉

雅筵辭集 丁酉の〜後句

唐穂河子とありて 断や葉乃喜 正親町公通

○正月廿二日末刻小石川の場銀井家系及
後持院の莊おん後持院を小日向の末小福とせり
宇通町八丁塙築地まで武家町を〜焼亡あり

○災後後持院を小日向の末小福とせり
武家屋敷浦海思地とあり ○正月廿二日能人北
小日向金剛 南院小葉 ○二月十一日能人下村堤亭率 保川法祥主率

○六月鉄炮海船松町より約込至寺授現の花
今奉とりと〜まる ○七月鉄炮海船是迄止

○八月鉄炮金通周止 二年限り
停止

○八月十六日大風雨家屋を損

○十二月十二日非田横大工町より火日本橋
同六月日焼く

り年々山崎町と人火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

火火魏町は谷芝田町まで

燒亡○十二月 比中丘限率

比中丘限率 比中丘限率の西小向村ゆき子小葉 名は青古 冠草老人と云一年は向村の流るは流る四あり

後 比中丘の列水 比中丘の列水

享保二年 戊戌 十月

喜より停勢多富と申りかて諸事より群多とるの難

○二月十五日深川本郷より鼻缺地流る今日より申りかて

半歳群集一り移りの難ひをうらるより江戸妙子あり

○二月廿二日傷作園井黄陵率 名孝祖 称表名節 三痛在禪より小葉

○五月朔日五高寺郷町より火通町八丁堀辺築地まで焼亡

○五月十五日傷作酒泉沙形率 名弘 称表名節 中見樹院下葉

○六月七日日本堤傍示杭法立智あり

○六月十八日離人其由亭み我率 六十七才女 本形古小葉

○七月十五日祐天上人月思小寂 八十二才 享保中二世祐海上人

送跡并寺を建てる祐天寺といふ

○八月廿六日傷作之宅觀潤率 稱九十九才約込 流老より小葉

○比代月市村作之思也室中道世一率所小自院院とて寺と

軍制一被阿と号し短しけるう今年十月十日六十五才あり

大沙せきをささりり ○十月廿日將時探偵や政率

○十月末留座六百人不定る ○同十月新令銀引智始る

○十一月琉球人來聘 心後 概束まき ○十二月廿日小石川白山社敷焼

○後事七馬同家の焼ははは院 同日より後事焼の名をぬきり

同日 己亥

二月十二日本町を町外に焼たぬ

十日自津島より大出づる結果 ○二月廿二日重徳を子に五百奉由忌

三月十八日より五月廿八日まで浅草寺の観世音菩薩 貞享四年より世三年因あり

○四月十三日安永東野率 号森窪社に在り二十七才あり楊梅福喜院に在り

○江戸町火消いりは組となりまる ○五月浅草寺の本堂修葺十万人

構始る 月六年九月小 ○浅草法蓮寺の第六天社今年災ふ小罹り今の

地へ入る ○九月朝鮮人來聘 正使依致仲副使黄瑞後事李相彦等あり旅者亦多あり 以時韓人曲るを

○九月廿日 韓人遣 勇向人 幸町茶碗屋より火事八丁

堀辺野焼 ○十月新吉原の町本座又七と云りの品川筋の町人をく

らひ所敷山の上りには小操せ居を元多る 辰堂八高五博名歌あり同十八のり二日のり舞いせ

○十二月九日能入天姥権障率 号五五五名新吉町新光のり小葉を

享保五年 庚子

二月廿五日堺島郡大お替大雲と焼亡 おわさか

○二月廿七日午年卯満辰町よりかき南風烈々となり町日本橋

を流る町を喰町を新田辺和泉橋下管上取坂本合移其の端

をとり流る ○上野二五門法蓮寺

○七月廿二日儒所中村揚藻率 五十に才名冠善 深川要津と小葉

○八月園東波あり ○八月町火消の纏りし組の方城を記し

長七尺の鳴流を中又提を記し おまて 聖徳を副由 以時代の纏を主人に腹の痛を並くす

○八月十八日儒所新田村森率 林 持平 合平の男 ○九月廿日大風

○今午冬々冷泉中納云為徳々法系向あり鳴とあり伝遍法身

解小流より強抛灯ハ
帆形更亦くゆ纏を再
○九月廿一日山内権現を神産子町よりか練物を知る 中納

○洞房浄軍談

石田光成編
板中の元文十一年

○菅系丸燈二冊

石田光成撰
謀所也

享保六年 辛酉 七月

正月八日昼に時辰後町より火入西水大風通き午時より京橋
本材本町八丁留本挽町後炮所築地靈巖寺銀町まで焼了

○二月三日辰下刻之河町に丁目妻町より火入して津田を中谷
上野江門焼滅する町に火入て焼亡

○二月四日己刻之身込込納戸町より火入小日向小石川辺一帯小焼了
白山の辺より之焼も入り日暮里まで焼了世傳通院へ逃入焼
死する者二百八拾餘人云々一基の焼を云々
火舎あり築土八幡宮白山社も焼
焼了傳通院災後殿堂傳房流燿未恙くは再建あり

○同寺前より火消在安小川町へ引く

○二月十五日金剛二柵川改次率柵川の
祖あり

○二月廿日水府侯由侍医吉岡林為率八十七才に當り大抵を不業義子
懐保享保十年己九月卒せり

○二月十二日水府侯信長森尚謙率号儼整

○二月法社の祭神の時在表と名つけしる物をわたりて修すあり

○五月神田橋法門和子於古林見宜醫書講法始法医師
聴せり

○六月十二日三十七日茶人懸宗知率号五京子下谷廣禮
中梅雲院不世并

○書物圖書定するあり○六月二日儒師波於保庸率保庸其而号寛每
其行在徳雲寺其葬後

○七月廿一日藪町八丁目通より妻に十口女食所同率小痛合利
をわたり新町小町のいへ又一顆をわたり翌年壬寅六月朔日其
又一顆をわたり小宮院を奉り中の人皆泣く觀を

又一顆をわたり小宮院を奉り中の人皆泣く觀を

○秋実東浩あり ○十月金限引習

○十月湯島寺丁月後色今橋場銀屋の多嶋といふ若る像の六地蔵を六本

材木町坂本町南茅場町八丁場鉄炮海築地まで敷焼

○十二月廿七日後後氏十一代通事五十八才

○南番別志あつぎ云々其穴いけといふ所いけ古今を塔いけする穴なりまみりまぶの平あり享保六年の以黄金の舟り流ゆをいけすといまふ年の

○其永井町岸町富山町坊上寺の火除地となり神田貝系習地を

享保七年 壬寅

二月十五日より八月十五日まで一橋町の御遊覧を
由りより事始り ○二月青柳寺名重玄 祿方内より増上寺本西田院 本葉の御遊覧を

○五月十九日儒原中根桂叢名重玄 祿方内

○六月市仲多野原マツノノエの論新義を六論新義ハ室橋梁生ノ釈也あり

○七月江戸中葉神六論新義ハ室橋梁生ノ釈也同西ノ一官刻あり河内小領あり

○八月八日儒原原見存勢町小云々今不建

○十月千川上七十七才本姓三階新右衛門書を以て後儀あり

○十二月六日神田新堀町親善寺施安畏の歌を言一人あり上秋後あり

○十二月六日神田新堀町安永九年のころ千川上あり再及あり

○小石川清草堂（註）養子所嫁十二月より貧困の病を治めず
茶脚をよめり（註）此の故を擧別故といひしことより後土俗病人故と
り記名人付通院前住居の医師小川實取と云ふあり

享保八年 癸卯

二月十六日赤坂傳了町よりお火病水風烈なり其病の久保迄燃了
武家方町屋類焼毀（註）○二月十五日より二日の間中村劫（註）之節
芝居百奉の奉迎云彩彩（註）意志敷懐若大々等々を具行に

○二月廿二日作木玄龍卒（註）七十四才文山の兄龍也あり
坊上寺中津運院小葬す

○二月廿九日能入志村玄倫卒（註）六十三才

○二月十九日折奉人磨千奉忌（註）二月廿日負金折奉社一
巨徳橋在大野非と流をあり

○元禄銀室永銀中銀（註）之室銀同室銀通用止

○九月十日新井明卿卒（註）白二男 孫傳為清法也
被劫する中より連ちり奉す

○六月陽作深井秋水卒（註）八十二才

○七月廿六日池上奉門中奉堂再建入佛供養（註）室永年中燒亡の後
廿二世日沼上人再真

○八月近江おあり（註）○音羽町九丁目青柳町おあり北拂おありの時
賣女あり（註）野とありて鳴や
音羽のころまは

○十月十日湯島天満宮造営（註）遷す
あり土
秀小茂

○十二月十日狩野潤春福伝卒

同九年 甲辰 己月望

正月十二日英一様卒（註）七十一才二本校義教中取聖院小葬次釋世
おありし浮世のよこの色とくも有てやそそ麻善の月

○正月廿九日如安町よりお火車（註）の露月町おあり本換町まで燒了
口津門燒失し十六の後津再建也（註）本換町中津
屋敷に造り

○為久保八幡宮去年の災後修造す（註）おあり造すありし
おあり

○甲府清城書院のり○二月初詳 本郷より火災築地近焼亡

○六月七日狩野永叔之伝才

○六月廿五日東郷毛隊長廿十尺小解のり色白くすの

尾の細きうことのり○八月清茂前札足百九人小定のり

○十一月廿一日能入二世の志才 清茂が孫の 戸葬のり

○寛和通曆刊行系伴根 之圭編

享保十年乙巳

二月十四日青山久保町より火災赤坂日谷市谷牛込大塚多羽
小石川薬師野込谷市下谷合村まで焼亡

○二月廿五日百羅得半再建法寺成院のり 是家元和尚元禄のまゝ
市津を勧化あり切されり

○二月十九日能入菊后亭秋之才 見一夏のまゝ色のうきつのり

○五月十九日官儀新井白石先生才 六十九才名譽 字居義
後集録其七序に徳七才葬

○六月廿二日古筆六代り膏才 五十二才

○七月廿日源政房才 一寸見河東のり 十二才天徳寺在平所初七才後橋
ち葬以を以建する碑子十三日葬之

○九月二日安房屋系方才 死 大々藤の小うのりをを良後大其ののり
以河原川馬江町小居一養我と号し

○十月大判出吹替元禄大判止志盟多又出吹替あり

○今年長身の人志賀随氣才 小が幼吉のり 伴後市書のり

石井幼吉のり 沼田伴茂のり 水野徳中のり 柴田十吉のり

中系長のり

同十一年 丙午

二月七日能入生玉のり 禁風のり

○二月廿日能入のり 女のり

○二月廿日能入のり

○二月廿九日傷作土犯野車 自親居七

○今年五穀豊饒あり ○日向院寺に落系那 赤地 天照山大吉寺

朝日如來密性 ○五月淺草小揚の狸を擲えり人の老母不仕く

奇特の事ありて慶賞金をのちり 崎人侍奉山 紀伊丹あり

○六月廿日御人の間沾池率 六十二本号合款量 後子母を討ち小葉

○今年より十七年まで深川十万坪小治に中清海あり 元文元年五月あり 日向寺清海あり

○十一月十八日大道寺友山翁尚齒令 志賀隨翁も府六人の 翁令をり云姓名書詳

享保十二年 丁未 正月室

二月朔日夜五羊時光物来より為く花雲の如く

○本控町衆女ら来りて協あり

○南田川本母寺梅名九七五十年忌寢帳 二月十五日 寺に寢帳

○喜尾徳集 知良村友山翁八十九才 編製年追加候

○五月十二日御人字村百里率 号雷六十二才多田中 別名西本江村小葉を 拜世の句 死て並てまゝ一死月を以てせり

びんをる不稿してまゝる書花里依文山の書あり 詩人雅慧の百里う田方あり 仕威 あくく朋をまひり 享保七年七月六月お及豫らう 田方寺中 松海波小葉を

○六月下旬より本別書取寺神宮修内へ常陸守行原大杉大御所

花梅ありてく火燄群集一乃夜も意結物を出し 災難あり

揺の夜歌を忌りて糸指を短あく 此本を修り

○釜原定林率 月日 未詳 ○十月七日新林本町白子倉店之御養子

又四郎妻のすまを三代徳八刑せり ひん世人の 知りあり

○十二月十日表二番町よりかき統町永田町鹿ノ宮上虎の山門久保

町ありて中増上を裏門焚焼るまて焼亡是より統町より通り

此地と成る ○十二月十日御人志邑徳林率 四十四才 約止 大雄寺小葉を

○十二月由桑名川橋渡るる由松小石川日向迎大木の所おきた
自中あつぬあり

○九月晦日儒師降後好義齋率 名邦達 泉岳寺小集

○十月廿日谷目宗守小鬼子母并像を安立 日法上人他縁念 任人藤田宗徳末

○江戸社記刊行 荒井志敷 編

享保十三年己酉 九月閏

○二月廿七日團学若跡於光海率 名良賢称管内七十一才 青山玉窓寺小集以

○二月十六日版田町坂上武家方より火 谷田宗及 由屋敷より 田安門并於焼の

取用地小減る ○五月交込國の鄭大威より 谷田宗及 由屋敷より 田安門并於焼の

源 去年六月長崎(北社二匹を海を北へ長崎に於て斃る今年に月社二匹を大坂へ 牽来り同月系取(入大内)幸く五月廿五日江戸へ長崎を社中社小ありし實際

小籠るは骨合も中社室取末小ありこの時系取より 濱御家の内舟ありし中社小愛取なりといふ

竹の葉をうけしものまじりて 鳥丸 老葉に

この時中村三迫り編の表の頁白梅屋より多頁珍記又編若知家志たどりや
おろせり江戸の俳人仙雀よりいふ 今やひく屋吉の権時うこつあり
しと正法を礼の時松町より大木の根り
おをりし事この時のまねびありといふ

○十一月廿二日書家後松保考率 号警侯翁 称清助 甚務皆徳雲と小集以

同十五年 庚戌

○正月江戸町火消に十七組を十組小定 目下お葉の羽形あり燈の吹流 止てをまを付るこの時小組に十

七組あり後小本組を末に十八組と小減止る追
小燈を大燈小まといひし中社 記を編たり

○二月十八日深見十方庵 九十方本江所 記を編たり

○二月本醫室燈廿五冊刊行

○二月本坂氷川湯社合并 社法建あり廿六日延有

○三月八幡文被損 五月十五日

日取五日のり地内おたけに勅化能具引 後金三つより一を三集
一人分浪二女つあり

○五月金丸銀丸先年の通り通用済免

○六月十六日辰野軒志賀随翁年 百八十三才天徳寺
中野野院小葬

○八月廿九日大風お海川世三乃星吹流も築地大丸あり

○十一月鶴りづりといふ渡を中る鼻よりとまゝりあり

○冬より翌年暮ふより麻疹流行 身うち白牛
洞をぬる

○是より見沼新田を築く 去る辰申年下総ふるまな見沼を新田小築也
一は田原をう源友藤といふ若を撰ふ
あつりて切を令せしう今年も又 命ありて是後味文平胤秀と撰ふはるを司り
あくの切を立たりては見沼の財川小船をせせんゆをうへん一ゆい言の保十六
足立侍士の二取の内より西の地をぬひは戸神田川の辺も邸地をぬひて見沼川運
漕は年々令せしきりて西を海船と云はる子孫弘化に年の得た小山田
与清也
なり

享保十六年 辛亥

正月八日狩野栄川古信年 二十六才

○正月十五日お大風年下刻目自甚武家方よりお火を辺のりて

正初も焼失関はる是町及代町辺中里赤坂の社を武家組

屋敷外込市谷辺邊坂上下お焼燬すて於焼圓時籠町之月續

番町一飛火年流中門布よりお焼燬強しは赤橋因度う實辺法

度藩邸虎津門幸橋中焼燬宅社跡り久保町甚は通町筋社

跡宮お浪地海辺ふり暮る時流る武家町を社敷り

火焼あり ○五月廿一日官儒安見晩山年 久元乃孫文平
麻布首領と葬

○七月十二日案人野田群翁年 久久志 極楽あり
菩提寺と葬

○八月十一日夜より十二日迄八時まゝ大風十七日夜并九月二日大

風あり ○九月十七日狩野栄川の憲信年 四十才

○十月十二日蓮上人蓮上人百九十年忌徳寺院法命あり

○十一月十二日耳うみ落降おちり ○十二月十九日儒師吉田希賢希賢卒

希賢 二本板

享保十七年 壬子 五月

正月十二日儒師矢野極齋極齋卒

名義乃 極齋 平 矢野 極齋 卒

○二月十二日堂室下青松寺より新橋と焼同日小石川白山

より火松平甲お彦郎お彦郎あり

○二月増上寺増上寺柵門柵門内子内子聖権聖権現勅請

○二月廿八日清系本統清系本統門門前より火清系下岩辺寺社町方

焼亡

は焼出為火除のころお松屋町藤原町福屋町等此内 町屋を 百よきま岩田系下岩辺寺社町方

○祇田原祇橋門再建立

町よりより祇田の徳入利の三分一を見繕り合三百ぬを 収むし服武家町人より寄附をりて建立

○浅草寺命院より上及新田医王医王職職世宗師世宗師冥帳

○岩船地所岩船地所為為目目是是よりより冥帳冥帳 ○天下天下肌肌腫腫疫疫癘癘行行る

○六月十二日六月十二日難難屋屋松松風風卒卒 ○七月廿二日儒師平野

金華金華卒

は十五才稱源常為乃五才物店 蓮光寺に葬られ金華卒と稱

○冬冬流流鞠鞠名人名人系系本本光光寿寿卒

八十才祇田小居せり鞠の空との小留味を丹練 たり辺世の好良ありて今も花あふ流方を

○昔昔くく抄抄源源流流

形見入た法入編写ありあり安 兼源の以より世上の風俗と述ぶる也

○江戸江戸妙妙子子初初輯輯流流七七卷卷刊刊行

兼源正源の編あり後流れありりき男 恒豊初交流補正再刻し今も世に知らる

同十八年 癸丑

○正月正月系系酒酒林林信信充充日日暮暮里里流流行行

○正月正月十二景十二景のの行行あり

十二景の流波系流・後父遠親 流禁川夕照 権多村 田家 玉子源林 平塚藩 務志秋月

○津津井井夜夜為為

建鑿山妙堂 冬流川流帆 中里勉流 西系勝流

○寛文九年七月十七日由京七八合目より絶死青山海峯寺

○二月より回内院より城及び城家新造始末開帳

○去年の引續き續送 ○七月上旬より疫癘天下より流行する十二日十日

大疫時東地より葉葉々々疫癘乃形を造るるを返るとして鉦おと

鼓をあらしむ年つれく海辺より○肌腫小付古救をぬる

○七月八日より藩士水野宗邦親世を宗家帳八月廿八日

○八月六日金眼工横谷宗砥卒宗中宗中

○八月十九日昼より夜小入りまゝ大風おを潰おぶ

○川崎川長き石親高の靈れいを海中より上る

○九月將時節参勤信唐土の鞍あしを馬を画する歌を後宗存

掘く ○江戸名物志云江戸の町人加賀屋長兵衛が自思を
掘く一内蔵英とくく東叡山の傍より百二坪の地をぬ

○十一月儀系徳公徳前社(巴里布)の歌を撰り今有是は徳徳沢村長子高と縁ありといふ

○江戸より初六十帖の文を思ふく云江戸市屋宗助といふ商人え福中よあまの大火小作本

本の傳ひをきくゆ又渡持院のる値交員未せぬくの利を好又今年日本橋を川渡

のゆを兼りて此費小社合より大分限となり糸原町小強せりこまらうとせざる格子を

江戸市屋格子といふ宗助五十才計りやて子被ふ

世をぬく徳徳一々百葉とりりといふ

享保十九年 甲寅

二月廿日引續き谷村の浪鯨ニツ流あり五尺あま松邊広場小舟

て着せたとく ○二月廿五日儒師田中崇徳卒二十六才 山谷

○二月廿一日弘法大師九百卒法苑を説く

○二月廿四日紀伊守屋宗重の死正徳紀文大皇之御号千山と云奥蔵寺中

降参院小墓あり晩年深川一の島居乃

別子居く

終り

○七月廿五日母上（毒）降（り）の（り）小（の）降（り）く井戸（へ）蓋（を）を（お）り

○八月十二日官儒室始（て）定（ま）る（事） 七十八才通稱新脚渡の蓋甲賀町宛
大塚海持院東農家の後小葬次

○九月十日能原桑忌貞祐（卒） 六十五才寺新
法若寺小葬次

○十一月官医平月（之）英法某法（の）七（宝）兵（衛）母（を）記（す）

○十二月奉勅（し）法（系）統（建）

○大坂豊布祀前（に）極（上）戸（へ）下（り）是（より）義（孝）寺（の）深（淵）賜（た）小（の）行（き）る（祀）前（に）極（上）戸（へ）下（り）是（より）義（孝）寺（の）深（淵）賜（た）小（の）

享保廿年 乙卯 二月

三月廿日浪神家（之）廿（二）回忌浪神家の齋居石碑を建（つ）て（お）り
南條小左衛門（あり）

○二月十九日儒師山田麟波（卒） 八弘嗣孫大依
谷中南山寺小葬

○二月奉石町（へ）初（め）人（を）奉（置）置（す）町医忌水玄浩（於）山（養）元（初）冬（を）制（し）て（同）本（中）湯（仙）見（光）人（を）奉（置）置（す）町医忌水玄浩（於）山（養）元（初）

○前（に）敵（人）丸山（授）左（衛）長清（を）終（つ） ○松板（の）名（号）回（向）院（を）記（す）

○同所（へ）下（総）郭（の）時（宗）帳（を） ○東（敵）山（小）右（祥）天（宮）建（つ）

○五月七日書家祐（之）本文（山）卒（す） 七十七才増上寺中
淨蓮院小葬次

○五月晦日儒師齋（目）爽（祐）卒（す） 四十六才郭場
正源寺小葬

○七月二日黒雲天を覆（ひ）大（風）瓦（を）を（吹）一（所）く（お）屋（を）損（壊）て（お）り

ありと（り）小（の） ○秋（雁）川（八）幡（宮）の（境）内（に）小（能）原（後）室（を）後（級）具（神）也

て（神）小（の）祭（り）小（の）祠（を）建（つ） 吉田家小中結あり一版ことり小後室終まりの事係り
年四月廿二日と早雲寺宗後法師墓の例并葬

○十月麻布（を）焼（亡） ○春（本）宮（陽） 後
文隆 命（を）家（り）て（再）葬（す）

載 ○冥（在）也（也）

人の美をとる者も多かりしは佛道の宗旨よりある事ありしに
志道軒の人の美ををしのびたるものありしなり塵垢清みあり

○時計本屋屋より海る ○江戸中書坊花御とてお茶屋より行渡

ありとてお茶屋より ○浮世繪師 奥村文角 芳月 西村常吉

仙花 名居清伝 同清傳 近藤助五郎 清喜 富川吟雪 房伝等

行る ○海より強宮古橋より後塚享保の末京都よりりり一時小

此より この時を後塚より風俗をよめぬて警文金凡とてこの橋を築立元孫多く春

鬢とて鬢の毛を下より上より上り月代の隙より巻込て結より衣類と對人

の羽折をよめー長き紐をせんふ小さくむきより下結の齒より

あり橋より一橋のむらさき一さく小笠はは時代風俗より

○半島渡船 江戸中書坊花御とてお茶屋より 河東前 平吉 貞川 貞 此より

○松澤庄五郎坂田庄五郎小倉庄五郎小唄流し

○大石と稱小唄流し 中村吉太郎とての音曲歌集よりあり

○琴お撲流し 花女金菊おとせり

○柘原角を流し えぞ 帆柱を多く切られ早く朽ちる

久しうとて止む 大はるまじ ○品川入口谷山稲荷社此は享保乃

以来お茶屋もあがりし今も町並やあまなりは社里民のおか小

しを遊ばし上人の化の時上人をかきかき勸請せりとあり

○大人保七面交列南法若るいむし 櫻の夕所より其毎々後

此所お茶屋せり おんトさん 号するもの由ありし享保の比に未

櫻も残りしとて遊観の人の稀ありし中書下店より

○連雀町の筋遠法門の内頂田町の續お茶屋より新所廣場とありて

今の西引けしるの享保のまゝありし

○享保の末横山町 新所廣場を此は行徳村地先字小三町と

馬乃る所小陸濱を築きて今加後新田と云ふあり又新田を築き
とりのりの築きし陸濱を築きし情新田とりのり
○世初武相の界に陸坂小夜毎小夜物の音あり苗敷に人の声
あつて中老人の声一人あり近き江をとりも安子の人あり
る不審しとて翌日之を尋ふり止 大坂屋敷 秋中か

元文元年 丙辰 五月七日改元

正月仁風一覽上梓公布あり ○後忌令官板

○正月九日茶人斤忌丸内率 号丁區 痛 如味と小華以

○京粟生時光波寺張子清新回向院小の宗帳

○同真如堂を奉る湯の社地小の宗帳 ○五月の字令銀通利六月

引習始る 文令張 ○六月廿二日園林行率 勅編と号小を管以 後年と丁宗安と小華以

○七月下旬より東の方小布紀早あり 教五時 以あり

○八月品川 わ書 坊 大統寺小長道子の等南法補陀山徳海寺立石

親世を像を写して碑を立る 素人亦伯喬写す 加後氏造立

○八月晦日古等より仲率 八十一才 除江と小華以

○十月小梅村ありを湊を築きし 背文小の字あり今年 獲江と小華以

○十二月江戸大雷 合運 小か ○十二月西く大畑ひ多く死に

○武蔵野地々考梓行 鶴毛原上愛生村百姓 田原原を而義章作 一りの日記梓行 叔法編

同二年 丁巳 十一月圓

二月十六日より庚若き親世を宗帳

○三月廿九日同白名勅を新長谷寺の境に表撞初めあり

○四月廿五日同白名勅の辺より流をくる所より不徳田町を

養老人亦未始也 ○五月二日下谷八杉町より矢火由徳士町を
上野廣小池池の端東敷山慈眼堂より坂本合於其の端まで
焼く ○七月十九日書加池永道雲率 名英具義則を以て
後系抄に於て小葉に

○八月川に管光とて小池魚小指り一り以而より再建の奉加
をよりむ男女老稚日毎小募縁の寄をうへ証をたし一市半
を群行一々絶材を募る九月小より信止せしる喜慶とてこの
奉加の事を書き置るの文あり則て其の文集小載し

○花鳥少く桜樹を載しあり同所一碑立吟風卿文を撰述 合編
は文面白き
なりれに記さる

○八月廿日儒師文重為秋率 林志左衛門
長谷川行小葉
○飛戸又深川小葉本川より清談あり小葉本川より清く下の見は
表の端或は背面小川の字あり

○十月十日夜五時星月を貫く 東より月中小
入り南方小あり

○十月七日世上二回小煙のやうに吹か火事の如く此節暖氣 ぐんき

○十一月十日水府彦儒師安横渡泊率 通称長八深川
陽嶽小葉

○十二月十日水府彦儒師安横渡泊率 号老牛居五十一才
あり舞水止めの川に

○薩摩芋此ころより追く弘まる室鷹小よりて上総下総へ
ゆくありく飛る

元文三年 戊午

二月朔日夜五時以光物落小

○二月廿九日儒師阪田東溪率 名陸奥 陸奥
本葉小葉に

○四月廿七日書家園秀竹率 林竹の園名義を稱持率
後系抄に宗安より小葉に

○五月五日儒師入江華率 名後字小里
常林小葉

信々○十月十六日東湖御所寂

小石川之御所照院より
葬を終るの頃又あり

此年間記事

小金井村

多摩郡

不和忍吉野常州櫻川の櫻の節を栽活

治寛永
のむら

植をせぬひ一雨あり一が延喜の
頃までも於植められしなり

○武蔵志料よ云終る森八幡之境地

ある所の鳥名の麻布雜之町の先古川と云

云云小松年在て齋年

是に今もその名を齋と云ふ元々の鳥名昔辰己の

知れんと此を於の森八幡一めと云ふと一あり書家の原

名を好む加ありと云ふ

○平林信信

信林
信直

又と鎌倉清方書つとて室町の帳面清方書

書を能くして大福帳の上書して賣事昔ありしは清方を

と云ふは清方の信直商人大方便り上書を求むと信直

細井廣海門下入能書の迹あり

○石巻の藤原松を中る市松形といふ身は藤原松也佐村市松

好むといふ一りあり○藤子の花めんがとありあり

寛保元年 辛酉 二月二日辰元

正月廿二日書家と書友と交遊辰年

七十一才号友赤
車坂大寺小葬也

○二月九日後後氏十二代書家辛年 五十二才

○二月朔日雲光院和尙要河寂

○七月廿七日信直佐後周朝年

○七月廿二日新井宜柳年

○十二月廿五日捨像流劍形祖

同一年 壬戌

同一年 壬戌

軍帳為難なる事才天軍帳○同日より王子控現同務所軍帳

○同日より日暮里澤光寺人丸形神軍帳

○同日より六所跡池下張軍帳 仍基井子千 二年辰位表

○己月六日医所屋月百里率 号雷山又第唐七十九才濟第其松院下 幕後和舟を結せ一人之因所百里二人

あり一人ハ能所言百里 雷と号は混れへく ○同日より湯治社内にて大坂天皇

聖徳太子軍帳 ○同日より市谷八幡文を野州東宮社山送王

と東条作如來軍帳 ○同日より池の妙書とて比叡山坂本不重

と祖所軍帳 ○六月二日尾形乾山率 八十二才号深宿松林之所法橋 光輝の兄之号とてその非之陶器不

名あり茶のりとよき 坂本宿を不重と ○室に月初進比五尾中宿を信 寛保元年の辰の 比五尾八友町あり

橋田辺の武と相小徳死せりあり一と比五尾町中にあるを止めひ一中之は尾七の六

十帖多多林田よりあるを上と一子孫田下谷林町本所あり下と比宿の御船所

を去り一八友町を中と一を藤原系つ以若末橋太田中比目町あり一あるは比五尾の子びく尾二人 細か加賀守あり 正徳二年より 備前藩其末橋の陣中にある上の比五尾の子びく尾二人

つまるる令堅固を かろうなること ○七月朔日より廣義流務所該務所軍帳

○同日より飯田町世羅務所軍帳

○同日より市谷八幡文ありとて風来寺日輪院不動尊軍帳

○十一月上旬より夜々孫屋為の方小理氏 孫屋 あり

此年間記事

郡落定通に戸小世六人あり點一ありあり一とて常例より
人の縛あり千の秋より小郷書あり今所定通と号は若殿百人
ありありへうへに世道の衰へるあり盛あり知り
○宮守の地山まねて嶺ありけ一葉屋女不ありあり

武江年表卷之四 畢

編者 齋藤市左衛門幸成

武江年表後編

從延享元甲子年
至嘉永元戊申年

四冊近刻

嘉永二年己酉十月刻

大坂心齋橋通博勞町

河内屋茂兵衛

江戸日本橋通二丁目

發行書林

須原屋茂兵衛

同 淺草茅町二丁目

須原屋伊八

發行

書林

| | |
|-------------|---------|
| 京都三條通井屋町 | 出雲寺文次郎 |
| 大坂心齋橋筋北久太郎町 | 河内屋喜兵衛 |
| 同心齋橋筋安堂寺町 | 秋田屋太右衛門 |
| 江戸芝神明前 | 岡田屋嘉七 |
| 同 日本橋通二丁目 | 山城屋佐兵衛 |
| 同 横山町三丁目 | 和泉屋金右衛門 |
| 同 本石町十軒店 | 英屋大助 |
| 同 神田旅籠町二丁目 | 紙屋徳八 |
| 同 大傳馬町二丁目 | 丁子屋平兵衛 |
| 同 日本橋通一丁目 | 須原屋茂兵衛 |
| 同 日本橋通二丁目 | 須原屋新兵衛 |
| 同 日本橋通四丁目 | 須原屋佐助 |
| 同 神田通新石町 | 須原屋源助 |
| 同 淺草茅町二丁目 | 須原屋伊八 |

